

## 日本におけるアザミの歴史

アザミの来歴とアマミシマアザミ、学名、*Cirsium brevicaulis*, (商標名、向春草) についてお話したいと思います。

まず、アザミ (薊) は世界で 250 種以上があり、北半球に広く分布しています。キク科アザミ属 (*Cirsium*) 及びそれに類する植物の総称です。標準和名を単にアザミとする種はありません。別名トゲクサ (刺草)、アザミナ、名前の由来は、アザム (傷つける、驚きあきれる意) がもとで、花を折ろうとするととげに刺されて驚くからという説があります。スコットランドの国花です。アザミの根は、山牛蒡 (やまごぼう) として漬物に用いられています。平地から高山まで広く分布し、日当たりのよい空き地、道端、野原、草原などにふつうに生えています。山地の溪流の縁や、砂れき地や海岸などにも出るものもあります。(出典: フリー百科事典、ウィキペディア (Wikipedia))。

紀元前 550 年前後に成立した旧約聖書にアザミは出てきます。創世記 3 章 17~19 節【聖書協会共同訳】には、  
17、神は人に言われた。「あなたは妻の声に聞き従い、取って食べてはいけないと命じておいた木から食べた。あなたのゆえに、土は呪われてしまった。あなたは生涯にわたり苦しんで食べ物を得ることになる。

18、土があなたのために生えさせるのは茨とあざみである。あなたはその野の草を食べる。(茨は *Ziziphus spina-christ*, あざみは *Silybum marianum*, であるとも言われています、キリスト、マリアの名が

入っています)



マリアアザミ (京都府立植物園)

19 土から取られたあなたは土に帰るまで、額に汗して糧を得る。あなたは塵だから、塵に帰る、とあります。

楽園の果物 (リンゴ?) を食べてしまったアダムとイブは神様から楽園から出て行くように、棘のある草と、アザミを食べるように神に言われました。砂漠の荒地ではえているのは棘のある茨とアザミだけだったのでしょか。



トゲワレモコウ (聖書植物園) 聖書の茨とも言われる。

日本では弥生時代から古墳時代の過渡期に登場する、卑弥呼 (ひみこ/ひめこ、生年不明 - 247 年) も食べていたと考えられます。邪馬台国がどこにあったのかまだわかりませんが、巻向地方に巫女集

団がいたことはわかっており、ここで、副食の一つとしてアザミを食べていたことがわかっています。卑弥呼の食べていたのは、赤い花で、長い茎のアザミと思われる。また、アザミの薊という漢字は日本書紀にも出てきます。第十一代、垂仁（すいにん）天皇（256-311年、在位）のお后のお名前に、薊瓊入媛 あざみにいりひめ、があります。漢字の瓊は玉のように美しいことを意味します。

天皇陛下の正妻のお名前に野草のアザミの漢字が使われています。これを見ますと日本書紀が作られた時代にはアザミというのが単なる野草ではなく特別な意味をもっていたのかも知れません。多くの美しい花きれいな花気高い花があったにもかかわらず、アザミと玉のように美しい、という漢字が使われているのには特別な理由があるように感じます。日本書紀は西暦720年に編纂されています。この時代のアザミについて調べてみますとあざみはふきと同じように重要な野菜で長屋王（684年-729年）に地方より献上されています。長屋王の屋敷跡から発掘された荷札（木簡）にアザミの名前が記載されていました。御園から長屋王家へ、フキとアザミが交易進上（こうえきしんじょう：買い上げて進上）されていました。

延喜式（927年成立）によると内膳司という役所でアザミは食用に栽培されていました。

君がため 春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ」（光孝天皇）。百人一首にでてくる万葉集の一首です。万葉集は、舒明天皇（630年頃）から淳仁天皇時代（759年）までの歌をまとめた日本最

古の歌集として知られています。万葉集に詠まれている植物は170種あり、その中に菜としてカブ、フユアオイ、ノビルなど27種がでてきます。つまり菜とは食用にした植物のことを指しています。万葉集にアザミの名前はありませんが、若菜にはアザミも含まれています。

奄美群島に自生しており、お正月料理として現在も食べられてきたシマアザミですが、西洋医学が入る前に奄美の民間療法として、腫れ、痛み、出血などに利用されてきた歴史があります。



アマミシマアザミ

（担当：医療法人徳洲会  
全南病院長 上山康男）